木立雨物語（こだちさめものがたり）

むかし　むかしのことである。

大永年中というから、今から約四六〇年前のことである。稲庭城の城主は、小野寺上野守道俊（こうずけのかみみちとし）という殿様であった。道俊は大へん神信心（かみしんじん）の心の深いお方で、今の小沢、かじやしき、白沢（皆瀬村）の三つの熊野神社に、それぞれ金銅づくりの、すばらしい懸仏（かけぼとけ）を寄進したほどである。この懸仏は、三体とも、今もなお残っていて、秋田県の重要文化財に指定されている。

道俊が、まだ若いころのことである。稲庭城の城門に、ひとりの男が訪ねて来た。田植えで忙しいころの、ある夜ふけのことであった。

城門を守っていた武士は、その男の顔色を見て驚いた。ものすごく青い顔をしている、まるで青い蛙のような色である。しかし、着ている着物は、あざやかな黄色の袴に、山吹色の上衣をつけた、りっぱな身なりである。男は道俊公の前に通されると礼儀正しく両手をつき、頭を下げて、静かな声で、次のようなお願いごとを申し上げるのであった。

「私はこの近くにある青ビッキ沼の主でございます。殿様のおかげで、今まで、何事もなく沼を守ってまいりました。ところが、この頃、夜になると、悪者が沼に現われて、私を殺そうといたします。私は、そのたびに敵とたたかって今までは、なんとか、追いはらってまいりました。けれども、毎夜毎夜のこととて、かた時も、心の休まるひまがございません。何とか、殿様のお力をおかりして、この悪者をほろぼしていただくことができないものでしょうか。この願いがかないますならば、どんなことでもして、そのご恩返しをいたしたいと存じます」と、涙ながらにお願いを申し上げた。道俊公は、これを聞いて、大そうかわいそうに思われ「よし助けてやろう。しかし、そのわるものは、どんな姿をしているのか」とたずねられた。

するとその男は「夜になると沼の上に、青い火と赤い火が出て来て、たたかっています。青い火は私でございます。赤い火は敵でございます。どうぞ、その赤い火の方をうちほろぼして下さるようお願いいたします」とねんごろに頼むのであった。

道俊公はその翌日、いちにち体をきよめて、熊野神社に祈り、日の暮れるのを待って沼のほとりに行き、敵の現われるのを待っていた。

はたせるかな、夜になると、男の話のとおり、沼の上に、青い火と赤い火が現われた。そしてはげしくゆれ動き、あるいはぶっつかり、あるいは離れ、けんめいに、たたかいあっているのが見えた。道俊公は、二つの火が、ちょうどよく離れた時を見はからって、弓に矢をつがえ、赤い火をめがけて、ひょうと、矢を射た。矢は沼の水の上を、うなりを立てながら飛んで行った。たしかに手ごたえがあり、あやまりなく、赤い火にあたった。すると、ふしぎにも、ものすごい音とともに、大きな波が立ち、たちまちにして、赤い火は消え失せてしまった。

翌日になって、稲庭城に、また例の男が、いかにも嬉しそうに訪ねて来た。

「殿様、ありがとうございました。おかげさまで、日ごろの敵をほろぼしていただきました。この上は、何か、ご恩返しをさせていただきたいと存じますが……」と申し上げると、道俊公は「私の日頃の願いは、何とかして、領内の人々が、水の苦労のない農業をやってもらいたいことである。水不足の時に、雨を降らせてもらえるなら、どんなにありがたいことだろう」と話した。

すると、その男は、「よろしゅうございます。ご恩返しに、できるだけがんばります。どうぞ、雨のほしい時は、お城から、朝月山の方に向かって、弓の弦を鳴らしてください。そうしたら、それを合い図に雨を降らせるようにいたしますから――」といかにも自信ありげに申し上げて、帰って行った。

そののち、日照りがつづいて、水不足がやって来た。人々は、さっそく、その男にいわれた通り、城内にまん幕をはりめぐらし、朝月山に向かって祈りを捧げ、道俊公が、弓の弦を高々と鳴らした、するとそのあいずを待っていたかのように、朝月山の峰の木立から雲がわき起こり、四方がたちまちうす暗くなって、ものすごい大雨が降って来たのである。

そののち、享保十三年（一七二八）の大旱魃の年も、この通りの雨乞いまつりをやったら、三日間も大雨が降りつづいて、人々が助かったということである。

この雨のことを、人々は、稲庭の木立雨、又は日照田雨といって今だになお語り伝えている。なおその沼というのは、高松の「青びき沼」のことで、ちょうど、朝月山のかげの方にあたる。

（この物語は、今から一六〇年ほど前に、菅江真澄（すがえますみ）の書いた『雪の出羽路』にも、のっている）